

古代史シリーズ1

「日本の古代文化とその伝道者」



本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

日本の文化は縄文時代から連綿と続く積み重ねの文化になっています。現代にも通じる平安時代から江戸時代に至る国風文化を知って古代を学ぶことで日本の文化の理解が深まります。

十数年前に大学での講義のために記紀を読みました。その時の素人の観点で古代史の素人の方向けにまとめてみました

著者：情報戦略モデル研究所

井上 正和

はじめに

本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

筆者は、以前「メーカーの田やコンサルタントが専門でした。二十年ほど前から大学での講義をきっかけに古代の文化や歴史に興味湧き、古代史のテキストを作り講義するようになりました。

元々、素人が古代史セミナーのテキストを作る訳ですから、古事記や日本書紀（以降は「記紀」という）が読めなかつたり、古代史は良く分からないと思われる初心者の方々が持たれる感覚が同様に疑問になりました。

当該古代史セミナーが以外に人気があるのは、素人の視点で不明点を解説することにあるのかもしれませんが。また、体系化されていて分かり易いとお褒めをいただきますが、元田としてシステム設計やプロジェクトマネジメントで体系化することが性癖になっていることが寄与しているのかもしれませんが。

日本の文化は縄文時代（一万五千年前）から現代までの積み重ねで築かれている特徴がありますが、日本にいますとその文化が何かも意識しないで過ごしています。

古代史シリーズ1「日本の古代文化とその伝道者」では、現代に色濃く表れている平安から江戸時代の文化、そしてその文化を形作った奈良時代までの古代の歴史と施政を全体俯瞰して、古代史の基礎知識を習得します。

本書は、記紀を読み解くために、参考図書を主体的に活用し記紀で裏付けをする形で進みます。図柄はウキペディアからかなり引用しています。活用した主要参考図書は次の通りです。

- + 「古事記」 竹田恒泰（学研）、「日本書紀」 宇治谷孟（講談社）
- + 「13歳のための 世界と日本の見方」 松岡正剛著 春秋社
- + 「日本の歴史 本当は何がすごいのか」 田中英道著 扶桑社
- + 「古代史の謎は「鉄」で解ける」 長野正孝著 Rinsen 新書 など

本冊子の古代史シリーズ1「日本の古代文化とその伝道者」の全体構成は次の目次にあげて置きます。

◎ 古代史シリーズ1 「日本の古代文化とその伝道者」の目次 ◎

第一章 「歴史の伝道師と精神文化」 4

日本文化の伝道師と歴史の捉え方の視点を知り、現在の精神文化の基礎にある
国風文化としての平安文化を探ります。

第二章 「鎌倉から江戸時代の日本文化」 21

日本文化の伝道師とその変遷から古代の位置づけを抑え、現在の精神文化へと
成長させた鎌倉時代から庶民文化の江戸時代までのポイントを解説します。

第三章 「日本の古代(倭)の文化」 40

古モンゴロイド移住から縄文・弥生文化の成立ちの出来事を抑え、日本人のルーツを
探っていきます。

第四章 「古代(倭)から大和へ」 54

日本文化の基礎作りをした古代大和朝廷(纏向遺跡)、倭(ヤマト)から日本に生まれ
変わっていく大和朝廷の誕生を探索します。

第五章 「飛鳥・白鳳・天平文化」 68

平安時代に繋がれていく日本文化の礎を作った飛鳥・白鳳・天平文化と天皇の施政
の関係を捉えます。

◆第一章 「歴史の伝道師と精神文化」の目次

第一話 人間と文化の関係を掴む 5

文明と文化の違い

語り部と聞き手の関係

プロクセミクス・文化距離感覚

人間文化のスタート

文化は感情の発散を統制することで生まれた

第二話 語り部の伝える物語には母系がある 10

英雄伝説の母系

一神教と多神教は自然環境から

第三話 理性脳は哲学を生み出した 13

ギリシヤ哲学

東洋の哲学

第四話 平安時代の文化と伝道師 15

平安文化の背景

平安文化の特徴

コラム…仏陀の悟り 20

第一話 人間と文化の関係を掴む

第一話は、二三方の著書、松岡正剛氏の「世界と日本の見方」と田中英道氏の「日本の歴史本当は何がすごいのか」、梅棹忠夫氏の「情報の文明学 中公文庫」を基本に話を構成し進めている。最初の「文化」と「文明」のテーマの定義は、梅棹忠夫氏の「情報の文明学 中公文庫」からの引用します。

日本の代表的な文化人類学者であつた梅棹忠夫氏は「文化と文明」を定義された。「情報の文明学 中公文庫」の中で、「文化は文明のもとに作られていくものだ。」と述べられ、「文明」と「文化」を定義している。（注）梅棹忠夫の略歴は、日本の生態学者、民族学者、情報学者、未来学者。国立民族学博物館名誉教授、総合研究大学院大学名誉教授、京都大学名誉教授、理学博士。従三位勲一等瑞宝章。日本中東学会初代会長を務められた。

文明と文化の違いから整理します。

文明とは、「人間を取り巻く装置系と制度系そして人間が作るインフラであり、足し算の生活文化である」と梅棹氏は定義している。「文明は文化を生み出すための装置系と制度系」とは、鉄道、電気設備、自動車、スマホ、インターネットなどのインフラを装置系と捉え、法律、業務規程、セキュリティ規制、国会などは制度系と捉えているということである。

つまり、生活する上での枠組み、フレームワークである。文明は何か文明のフレームワーク（基礎インフラ）があると、それに追加の機能を加えてさらに高度なフレームワークへと発展していくことになる。

たとえば、電話は、インターネットが開発されて携帯電話、スマートフォンへと発展した。かつての大砲は、ロケット、大陸間弾道弾、宇宙ロケット、宇宙ステーションへと発展している。文明は将にどんどん追加され発展する「足し算の文化」と言うことが出来る。

一方、文化は、「精神面における価値体系として現れるリフレクション、すなわち、文化の問題はすべて文明の問題から派生するものであり、引き算の生活文化である。」と定義している。

リフレクションというのは日本語では「反射」である。文化を精神的な価値を映し出したものと捉えたということである。日本の代表的文化である「茶道」、「華道」、「料理」を例に取り上げてみましょう。

茶道は、千利休が訪れた客や友に茶を喫して退出するまでの全てを、「一期一会」の充実した時間とする「もてなしの空間」に作り上げた。そのことは、お茶を飲むことを一期一会で心を通わせる精神文化に高めたということになる。

華道は、おもてなしと心のゆとりのための「生け花」という自然を屋内に取り込み楽しむ文化を、「自らの美しい心と繋が

り、心を磨き高める道(どう)の文化」に高めている。

料理は、人が生きるために食べる、食事するということから、懷石料理のように目で楽しみ食するというような満腹感のみではない精神的満足を作り出している。

「茶道」、「華道」、「料理」では、素材、陶器や容器、作法が文明で、作法の熟達・改善による精神的価値観を作り出す文化に仕立てたことである。これは精神的価値を高めるモノを求めて絞り込んでいく「引き算の生活文化」と言える。

さて、文化と文明の違いをみてきたが、この文化は世界の国々でみると全く異なった発展を遂げている。何故異なった文化になるのか、この異なる文化は如何にして作られるのであるのか？

この問いに応えるには、人間の特性を踏まえてその要因を考える必要があります。

まず、その人間の特性を文化を伝える語り部(伝え手)と受け手(聞き手)の関係から捉えてみましょう。

人は同じことを聞いても聞き手の理解度によって解釈が変わるし、伝え手が如何に伝えたかによっても聞き手の解釈が変わることにある。たとえば、伝え手が「ここではきものをぬいでください。」と言ったとする。

聞き手には「此处で、履物を脱いでください。」と解釈する人と、「此处では、着物を脱いでください。」と聞く人の二通りの解釈が出てくる。情報を区分して聞き取っていく「情報の区分別」が聞き手で異なるからである。

一方、語り部も価値観によって伝える内容を編集して伝える。たとえば、覇権争いを征した王が後世にその伝記を残そうとして語り部となったとしよう。その王は「如何に正義を貫き、国を統一し、善政を施してきたか」は伝えようとするが、都合の悪いことは書かないように伝えることになる。つまり、語り部が編集してその内容を伝えていくことになる。作られてきた文化の伝承も同様な伝承になるので、それぞれの部族やそれぞれ国で異なった文化が出来上がっていくことになる。また、距離が離れても、それぞれの国で文化は異なってくるが、「何故なのか?」、これをプロクセミクス(文化距離感覚)と言う。人間の特性の二つ目はプロクセミクスを取り上げます。

プロクセミクス(文化距離感覚)とは、距離が離れると文化が変わるということであり、プロクセミクス(文化距離感覚)による文化解釈の違いが出てくる。それは距離が離れるとそれぞれの人の認識も変わり文化も変わっていくことにある。遠くから見ている時は美人に見えたんだが、近くではそれほどでも、・・・というのはよくある。つまり、距離が離れると見え方・解釈の仕方が変わっていくことである。このことは、それぞれの国で異なる言語を持っていることから容易に想像できる。それぞれの民族が遺伝子として組み込んできた感覚である。

たとえば、秋に欧米で窓を開けて会議を行っていると、日本人には虫の声がうるさいほどに聞こえる。そのことを同席している欧米人に「虫の声がうるさいね。」と言うと、「どこに?」と怪訝な顔をされるそうです。よく聞く話である。日本人は

和歌や俳句にも歌われるように重要な音と捉えているので聞こえるが、欧米人にはそんな文化はないので、虫の音は雑音の部類で音をシャットアウトする。そんな遺伝子や脳内回路が出来上がっているのかもしれない。

この類の例には事欠きません。

日本では、誰かにこっちにおいでと右手を上下にひらひらさせますが、アメリカで同じ動作をすると、跳ね上げる手の動きを見るので「あつちへ行け」、「出て行け」という意味になる。

また、私たちが手で数を数えるときは、広げた指を親指から閉じていつて「いち、に、さん、し」と教えますが、アメリカでは逆に最初に全部の指を折って親指から順に広げながら「ワン、ツ、スリー」と教える。

国による文化認識の違いをみてきましたが、日本国の中で捉えても多くのプロクセミクスがある。「ラーメン」を例にとろう。ラーメンはもともとは中華そばであるが、プロクセミクスによって日本産に変わった。国内で見ても、とんこつ・細麵の博多ラーメン、醤油・中麵の東京ラーメン、こつてり・スープ縮れ麵の札幌ラーメンなどをみると一目瞭然である。

人間だけが持つ文化を作る能力にはプロクセミクスによる遺伝子の特性が組み込まれていて文化が作られているということになる。

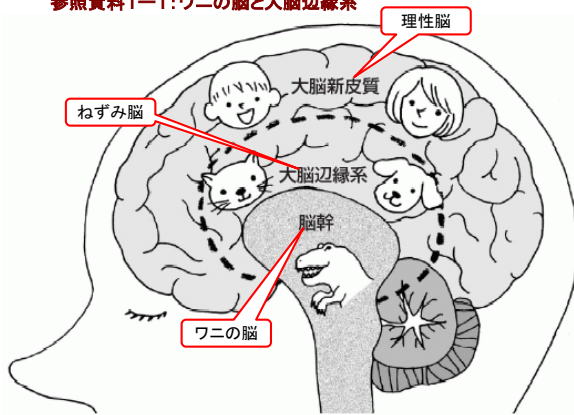
人間の特性の三つ目は、文化を作り上げていく人間自身です。それは他の動物と異なり文化を作り上げる特性を備えて生まれてきているということである。他の動物と異なる特性として「二足歩行」、「手を使える」、「並行視・パララックス」、そして、「ネオテニー（幼形成熟）」と「後天的な刷り込み（インプリンティング）」を持っていることで文化を創り出した。

人は、「二足歩行」を行うことで他の動物とは異なり文化を感じるようになった。それは他の動物のように四つ足で歩くと思えないことは自分で試行してみるとすぐに理解できる。また、二足歩行をすることで、手が使えるようになり、並行視（パララックス）もできるようになった。

また、「手が使える」ようになることで、指を折って数を数えるといった「数」の概念を人間は獲得し、道具を使い、縦横の線を使って図や文字が表現できるようになる。横の線書きは人間に最も近いといわれるチンパンジーに鉛筆を持たせると縦線は書けるが横線は書けないし、人間の幼児も苦手である。これはサルだったころのプラキエーション、すなわち、二本の腕を使つて木の枝にぶら下がりながら渡っていくときの前後に手を動かす記憶が残っているのだからと言われている。腕を横に動かしたり振ったりする動作はヒトが人間として生まれて、その文化の中で学習したことなのである。

そして、二足歩行を始めたことで、目の位置は顔の正面だが、若干離れているが、このことで遠くの木を見たり、素早く焦点を変えることが可能になった。人間の視野角度は二〇〇度程なので、正面を向いてもぼんやりと正面以外も見え、「並行して視（並行視）」えて判断し行動できる。一般の動物は目が横に付いたり、正面でも真ん中に寄っているため、遠く

参照資料1-1:ワニの脳と大脳辺縁系



を見て素早く焦点を合わせることはできない。さらに、一足歩行は言葉を生んだ。立ち上がったことで、四つ足の時は見えていたメスの発情期が見えなくなり、相手への伝達手段が必要になってきた。動物である以上、種の保存は最重要事項であり、相手に自分の意思を伝えるために言葉が生まれてきたと松岡正剛氏は分析する。

さらに、「ネオテニー(幼形成熟)とインプリンティング(刷り込み)」という特性を備えている。

人間以外の動物は、誕生すると同時に立ち上がり、歩いたり走ったりできるようになる。そうしないと弱肉強食の世界では即、死を意味するからである。しかし、人間の赤ちゃんは出生時は何もできない。未成熟で生まれてきているので、よちよち歩きまで一年、言葉を使つて話せるようになるには三年かかる。

三歳が一つの節目で、三歳ごろで話せるようになるが、大人になって三歳までの事を思い出そうとしてもその記憶は思い出せない。それは記憶が出来ていないのである。記憶がないということは自己が無いということと同じである。自己とは他者を認識することで出ていく。記憶がないということは、記憶回路や自己表現の回路が出来ていないために自己認識が出来ないからと想定できる。三歳頃になって、突然友達の話や身の回りの出来事を話し出すことから自己回路や物語回路がその頃に出来ることを頭している。

三歳からの人間は「後天的な刷り込み(インプリンティング)」で成長するように造られ、それは死ぬまで永遠に続く(ネオテニー)のである。何歳になっても生き生きと活動されている方々みると、そのような方々は行動的であり、勉強家である。つまり、人はその活動環境にある他人や他者を介して、学び、思考をしようとしても成長するように造られているということを表している。

文化は感情の発散を統制することで生まれたと考えられる。なぜなら、人間の脳の構造は動物から人間に至った過程が形作られているからである。人間の脳は三種の性格を持った脳、動物から人間に至る発達過程の順に「ワニの脳」、「ねずみの脳」、「理性的脳」で構成されているのである(参照資料1-1)。

「ワニの脳」とは、原始的動物のワニも有する動物共通の脳で、生存のための基礎的反射中枢(血圧、心拍、呼吸、姿勢など)の反射の機能のみを持つ。基礎的反射中枢の機能なので反射脳とも言われ、大脳基底核辺りにある「脳幹」をいう。

「ねずみ脳」は、人間の脳で情動の表出、食欲、性欲、睡眠欲、意欲、などの本能、喜怒哀楽、情緒、神秘的な感覚、睡眠や夢などを司っており、さらに記憶や自律神経活動に関与している脳で「大脳辺縁系」をいう。ねずみのようなずる賢い行動ができる動物に存在する脳である。

「理性脳」とは、ワニの脳やネズミ脳が発達すると攻撃や争いの絶えない世界になっていくが、為政者はこのような本能の暴走を抑えるための理性脳を発達させることで争いを無くそうとした。そのことが、宗教、舞踊、哲学、建築、文芸などの文化を発生させ、拡大させることになった。文化の始まりは「神への畏れ」から、「神を作り宗教」と発展したところが始点になったのである。

第二話 語り部が伝える物語には母系がある

文化は「神への畏れ」を表す宗教が始点になったが、語り部の存在によりいろんな発展を遂げている。文書もない時代に如何にして語り部は神の物語を継承したのであるのか？

松岡正剛氏は、語り部には「英雄伝説」が母系として存在しているという。その根拠として、故金田一京助博士がアイヌ調査とジョセフキャンベルの英雄伝説を上げている。

アイヌは数千行もの叙事詩、アイヌの「ゆーから」という詩を一举に語ってくれたと驚嘆されている。語り部は歴史を伝承するための記憶の自己回路を有しているようである。

アメリカの神話学者のジョセフキャンベルは「それは英雄伝説」という記憶回路であると述べている。

英雄伝説とは、人は負けることより勝つことを喜ぶ。また、厭なことより楽しいことが好きである。英雄というのは、負けたことがないから英雄になる。そして、英雄は出身の地や部族にハッピー・幸福をもたらすことで神になる。

英雄の物語は、「セパレーション(出発)」、「イニエーション(冒険)」、そして「リターン(帰還)」で構成されるリズムにある。英雄は常に勝利し郷里に錦をかざるのである。この話の回路は人に心地よさを与えるので記憶に残っていく。その証拠に、この話の回路で作った映画は必ず成功しベストセラーになっている。スターウォーズ、シンデレラなどを挙げている。確かに、人気映画・ドラマである「男はつらいよ」、橋田寿賀子が書いた「おしん」、「渡る世間は鬼ばかり」なども同じパターンである。人はこの母系に触れるとはまってしまう。人間にはこのような物語回路が埋め込まれているのだからと松岡正剛氏は述べる。キャンベルは、語り部はこの物語の母系で英雄の話を記憶し伝えていったという。英雄は神になって伝えられる。しかし、神は人の生存環境によって変わっていくのである。

人は生存環境によって一神教と多神教の神を崇める二種類の神が出来ていった。人間を統制する文化は神から発生したと述べてきたが、人の生存環境で神の形態も変わってくるのである。世界には、大まかに捉えて一神教の国と多神教の国がある。この二種の神は全く異なる性格を持つていて、それらの神は神を祀った種族の生存環境に依っている。

一神教で代表的な宗教にはキリスト教やイスラム教があるが、それらの神の発生地は厳しい自然環境の砂漠である。一つ間違えば死が待つ「生と死の二者択一の世界」で過ごさねばならない環境では、逡巡は許されない。そういう中では、強いリーダーが育ち、それも一人に絞られ、「善」と「悪」の対比による二分法で物事が即座に判断する環境が出来上がっていた。

キリスト教が興る前のユダヤ教の時代の「出エジプト記」では有名なモーゼがいる。この物語はエジプトで養われていたユダヤ人に王権からの虐待が始まる時期に、モーゼがエジプトを捨てて、約束の地「カナーン」に向かう物語である。エジプト人に海岸に追い詰められたユダヤ人が、間一髪のところまで海が割れる。渡り終わると、海がもとに戻り追手のエジプト人は海に飲み込まれてしまうという有名な場面がある。

その後、シナイ半島をさまよいシナイ山で^注エホバの神に出合い「十戒」を授けられ、エホバとユダヤ人との間に「契約」が結ばれた。（注）旧約聖書に現れるイスラエルの最高神。

どんな契約かというと、ユダヤ人たちに「イスラエル」という国を保証するという「約束の地」の保証である。この約束の地はイスラエル民族の所在地が時代によつて「カナーン」と呼ばれたり、「イスラエル」とか「ユダヤ」とか「パレスチナ」と呼ばれ、現在も民族と宗教をめぐる争いの震源地になっている。このモーゼ神話の後、ユダヤ教がキリスト教へと主導権を変える歴史替えをイエスの弟子パウロが編集することになる。どんな編集かというと、

「イエスは原罪を負つて生まれてくる総ての人々の罪を贖（あがな）うために十字架で死んだ。しかも三日目に復活した。それは父なる神がイエスの贖罪（しよくざい）を正しい在り方として認めたのだ。だから、イエスを信仰することで誰もが罪や死や苦しみから解放される」と説いた。「洗礼を受けることで、天国（行ける）」ということで大変な共感の人々から得た。

一方で、キリストを絶対神とするとき絶対悪としてのサタンを作る。その悪魔のイメージを異教徒が信仰している偶像を使つて表した。アンチ・キリストはサタンということになった訳です。

イスラム教も一神教です。七世紀の初めにマホメットが世界で初めて最初から文字を持った宗教「コーラン」として興しました。コーランはその当時の各地の文字を使つて使い分けて書いてあるので大いに受け、あつという間に広がっていき、最初から軍隊を持った宗教であつたことからイスラム世界が拡大していった。

しかし、マホメットの死後、アラブ人を中心とする「スンニー派」とイラン人たちが中心の「シーア派」に別れ、深刻な宗教民族抗争が現在も続く。一神教では、その民族の絶対神となるため他の神を受け入れ難くなる。

今もキリスト教と他宗教、キリスト教内でもカトリックとプロテスタントのような宗派の違いでも争い種を作ってしまう宿命にある。

それでは、多神教の神は如何にして作られたのか？

多神教の神は森林の神と言われる。森林では動植物の生き物の恵みがあふれる。人が生活して行くための恵みが森があることでもたらされる。海もこの森林の豊かさで豊饒の海となる。自然がすべて恵みをもたらす神となっていく。すべてのものに神、精霊が宿るということからこの信仰を精霊信仰（アニミズム）という。アジアでは日本を含め東南アジアや南米に根付

いている信仰である。

日本では、これらの神を「八百万（やおよろず）の神」として敬った。日本のアニミズムは世界の中でもユニークである。

そのユニークさは地球儀でみると、日本の緯度が温帯地域にあり、しかも日本は「温帯雨林」と言われる。一方、この緯度に位置する他の国々には豊かな森は無く、サバンナやパンパスといった草原か砂漠である。日本はインド洋で上った水蒸気がヒマラヤ山脈に当たり雨雲を作り、偏西風に乗って雨を降らせる雨雲の通り道になっている。日本は温帯地域で豊かな森と世界一魚種の多い豊饒の海に囲まれた国になっているため生活に困らず、戦いが少なく神々の多い国柄を作ったと言える。他国から他人が流入しても十分に生きていける食料が確保できたということである。

アジアでは宗教として仏教が広がりました。お釈迦様（釈尊）の教えです。釈尊の説かれた仏教は、「どんな人でも救われる」という教えですが、弟子の解釈で小乗仏教と大乘仏教に分かれる。小乗仏教はインドから東南アジアへ普及していきま

す。修行は出家を前提にし、まず自分が悟ることとで人を悟らせるという教えです。大乘仏教はインドから中国を経て日本へ伝わってきた教えで、基本の教えは「自利他利（じりたり）」。意味は他人に親切にし、他人を幸せにすることで自分が幸せになるということです。釈尊の教えはこの大乘が基本にあります。

日本では八百万の神がいたのですが、その中の一つの重要な神として仏教は受け入れられた。一神教では宗教問題は民族紛争の根源になるが、日本では聖徳太子による「神仏習合」の考えのもとに若干の小競り合い程度で受入れられた。多神教のお陰であろう。神仏習合では、日本土着の神祇信仰（神道）と仏教信仰を融合させ、仏や菩薩（本地）が衆生を救う神（垂迹）として現れるという本地垂迹説（ほんちすいじゃくせつ）を説く。

宗教は人間の理性脳をコントロールする手段として為政者は活用したのだが、人間の理性脳はさらに「哲学」を生み出していく。この哲学が宗教に加えて文化の創造に大きな影響を与えていくことになる。

参照資料1ー2:ソクラテス、プラトン、アリストテレス



出典:「哲学の殿堂—ソクラテス・プラトン・アリストテレス」荻野博之著 (NHKライブラリー)

第三話 理性脳は哲学を生み出した

理性の脳は、将に人間の脳と言われ、合理的で分析的な思考や言語機能を司る脳である。この脳が哲学を生んでいく。西洋では、ソクラテス、プラトン、アリストテレスが生んだ「ギリシャ哲学」、東洋では老子や孔子に代表される老荘思想、論語、儒教などの「東洋の哲学」である。

「ギリシャ哲学」では、人間が普遍的に共有する理屈(ロゴス)を考えた。今で言う「ロジック」ですが、ソクラテス、プラトン、アリストテレスの三人が、現在まで引き継がれるロジックを作り上げたことは画期的です。この三人の関係はプラトンはソクラテスの弟子、アリストテレスはプラトンの弟子です。

ソクラテスは、人間の対話の中から「知と真理」が生まれると考え、実践を続ける。プラトンがアリストテレスと対話しながら。パルテノン神殿の階段を降りてくる絵画は有名です(参照資料1ー2)。ソクラテスは「対話することが真理を導く」と考え、「問答法」という対話手法を発明しました。これをフィロ・ソフィア(哲学)と言いました。問答法は現在でもダイアログという手法でも紹介され、活用されています。

プラトンは、ソクラテスの意思を受け継いで「理」で作られる人間社会や世界があると説く「イデア論」を展開しました。プラトンは当時のアレクサンダー大王の家庭教師となり、「イデア」に基づいた理想都市「アレクサンドリア」を創る支援をします。現在、アレクサンドリアの遺跡として十六都市が発掘されている。

アリストテレスは、イデアの研究をさらに拡大して、神羅万象に関する「学」を確立しようとします。まず、「自然科学」という自然に関する学問を切り出して整理し、「形而上学」という思考や思索に関する学問を構想しました。

自然科学というのは物理学や化学、数学といった世の中に起る現象を体系化するもので形而下学と言われる。対して、形而上学はあらゆる存在者を存在者たらしめている根拠を探究する学問で、「人間は何のために生きているのか」や「世の中の善とは何か」などの問いかけの本質や根本原理を突き止める学問(哲学)である。

東洋に目を向けましょう。東洋でも同時代に「東洋の哲学」が生まれています。

「東洋の哲学」では、代表的な哲学に「老荘思想」、「論語」と「儒教」があります。論語と儒教はともに原点は孔子です。孔子という人は、春秋時代末期に活躍していた魯(ろ)という国の人で、孔子が中心となって編纂されたといわれているのが「春秋(しゅんじゅう)」、春秋時代の命名のもとになっている書物です。

老荘思想は、一切万物を生成消滅させながらそれ自身は生滅を超えた超感覚的實在、現実世界のあらゆる対立差別の諸相を包摂してその間におのずからなる秩序を成り立たせている絶対的一者としての道(どう)の概念であり、その在り方を示す無為自然である。老荘思想は窮極的にはこの道(どう)のあり方を体得し、いつさいの人間の営為(偽)を捨てて、天地自然の理にそのまま順(したが)った真の(為)を実現することを目指す。仏教思想と結合して(荘子の学)を生み、禅宗の成立に多大な影響を及ぼした。

論語というのは実践哲学で、人間の関係性の中でいかに対処すべきかを書いたもので、孔子の弟子たちが編纂しました。

「過ちては則ち 改むるに 憚ること勿れ」、「義を見て為さざるは、勇、無きなり」、「利に放(よ)りて行うときは、怨み多し」などの代表的な句を見ても将に実践哲学であり、生活上の対処法を述べています。

儒教とは、^注 儒家の教えで、人間の社会生活についての教義を説いたものです。理想の姿は神ではなく聖人君子です。(注) 儒家とは、孔子を祖とする学派の総称のことです。

孔子は、「仁」をととても大切だと考えていました。儒教の教義に「五常の徳」が説かれています。「仁義礼智信(じんぎれいちしん)」です。その意味は、

仁 「愛」、広く人を愛し、思いやること。

義 「正義」、人が歩く正しい道。利欲にとらわれず、なすべきことをすること。

礼 「礼儀」、親や目上に対する礼。敬意を持つて他者と接すること。

智 「知恵」、善悪の判断。道理を得る知識を重んじること。

信 「信頼」、現行一致。真実を告げ、約束を守り、誠実であること。

さらに、「修身齊家治國平天下(しゅうしんせいいかちこくへいてんか)」という思想を広めました。これは、「身を修め、家を斉え(ととのえ)、国を治めれば、天下は平らぐ」ということです。

哲学は、人間の社会生活におけるルール・制度を創つていき、社会を安定させ、文化を育むゆとりを作り上げていくのです。

第四話 平安時代の文化と伝道師

日本の文化の観点に戻りましょう。「日本の文化は如何に発展したのだろうか？」と考える前に、日本の文化自身を勉強しなければなりません。毎日の生活の中で接しているため日本文化に余り気づかないし、私たちは意外と知らない。古代史を勉強するには、日本の独自の文化を知って、判断の基準を作って置く必要があります。日本の文化は古代からの積み重ねの文化だからです。現在に残る日本独自の文化を概括的にでも分かっていると古代とのつながりを掴み易くなります。日本独自の文化が急速に発達したのは平安時代からである。当時、右大臣であった菅原道真公が八九四年、遣唐使廃止令を發布する。この時点から、中国や朝鮮にはない日本独自の国風文化が育っていくことになる。日本文化の原点と言える。

菅原道真公は末期の唐（九〇七年滅亡）から学ぶべきものが無いと判断し遣唐使を廃止する。それだけ日本での文化に自信が出来たということでしょう。平安時代は平安京遷都（七九四年）から約三百年強の間宮廷文化が栄えた世界に類のない時代である。平安京の御所は諸外国の王城に比べると、何の防御もない泥塀・木造門である。世の中が如何に安定していたかを想像させる。その理由に次の二点があります。一つは、七〇一年發布された「大宝律令が普及」したこと、もう一つは、「最澄と空海による仏教の制度化」による安定である。

「大宝律令」が全国に普及し、国家としての政治体制が整ったことを顕している。八〇二年には最後の抵抗勢力である蝦夷の英雄、阿弓流為（あきなが）が降伏している。大宝律令による律令政治の代表的な制度は三点、「公地公民制」、二官八省、「班田収受の法」が挙げられる。

「公地公民制」というのは、人民と土地は大和朝廷（天皇）のものであり、大和朝廷（てんのう）が直接支配する制度であり、日本が天皇の領地になった。日本が天皇の下に統一された国家になったことになる。

「班田収授の法」とは、人民に口分田を与えて米を生産させ、租（そ）・庸（よう）・調（ちょう）・雑徭（ぞうよう）、防人（さきもり）の役割を課した法律である。

租・・・口分田から米を收穫させ、3%の米を大和朝廷に納める税

庸（よう）・・・労役のかわりに布を大和朝廷に納める税

調（ちょう）・・・地方の特産物を大和朝廷に納める税

雑徭（ぞうよう）・・・地方の土木工事をする。

防人(さきもり)・・・九州の警備につく兵士。装備や九州までの旅費は自分で用意する。

「二官八省」というのは、天皇の下に、朝廷の祭祀を担当する神祇官と国政を統括する太政官が置かれ、太政官の下に実際の行政を分担する八省が置かれた。八省のものには職・寮・司と呼ばれる実務機関が設置されていた。神祇官は、^注祇祭祀(ぎさいし)を司る。忌部氏、大中臣氏、白川氏、卜部氏が世襲氏族として四氏が割り当てられ、重要な案件の良否を判断した。(注)神や祖先を祭ること。祭典。

太政官は、国政一般を司る。八省の行政機関を預かり統括し、天皇は判断を下す役割になった。皇帝が行政に絶対王権を持つ中国の律令制とは全く異なる政治体制を作った。

日本の大宝律令は、唐の律令制三十巻の法規を日本の実情に合わせ十巻に、かなり異なったものに編纂したものである。大和朝廷が、法治国家として全国を統治する体制になり、安定した国家基盤が出来たことである。

もう一つの「最澄と空海による仏教の制度化」というと、奈良時代から律宗の鑑真和尚など素晴らしい仏教があつたのではと思われるかもしれませんが、その通りなのですが、奈良時代の仏教は、釈尊の教義、ことに分かれた「南都六宗(なんとうくしゅう)」という学僧の宗派でした。その六宗とは、

三論宗(さんろんしゅう)、中論・十二門論・百論)ー華嚴宗や真言宗に影響を与えた

成実宗(じょうじつしゅう、成実論)ー三論宗の付宗(寓宗)

法相宗(ほつそうしゅう、唯識)、中インドから玄奘が帰国し唯識説が伝えられる

俱舍宗(くしゃしゅう、説一切有部)ー法相宗の付宗(寓宗)

華嚴宗(けこんしゅう、華嚴経)ー四法界と言う世界感。物事の神髄をありのままに見る

律宗(りつしゅう、四分律)ー真言律宗等が生まれた

平安時代になると、奈良時代の鎮護国家の国ための国家宗教から釈迦が説いた「人を救う」大乘仏教を体系化した世界へと進んでいきます。その改革のリーダーが最澄と空海です。

最澄は、天台宗の開祖です。天台宗は南都六宗をすべて包含した教義と考えて良いでしょう。最澄は、天台宗が朝廷に承認されるために「顕戒論(けんかいろん)」を表し、大乘戒を説きます。そこでは大乘仏教の根本にある「出家者だけでなく、すべての人々を救済するのが仏教であること」を訴え、「大乘の戒律だけによる受戒によつて僧の資格を与える」という大乘思想を書にして朝廷に申請しました。当然、奈良の南都六宗は反発しますが、その反対に対して最澄は総て反駁を加えて戒律思想を詳説し、大乘戒を承認させました。それが「顕戒論」で、朝廷に承認され、仏教は奈良から平安京の天台宗(延暦寺)へと移る。

空海は、真言宗の開祖です。真言とは、大日如来の「真実の言葉」という意味で、密教として伝えられた。大日如来を教主、大日経・金剛頂経（こんごうちょうぎよう）を根本経典として、仏と人の出会い（合一体験）、即身成仏（そくしんじようぶつ）を説く密教を高野山で広めました。密教での「蜜」は仏と人の出会いである合一体験（悟り）を言っている。全く別世界の仏と人との架け橋の絵解きが曼陀羅（まんだら）である。仏とは大日如来であり、そのために^注加持の行（ぎよう）を行い、合一を体験することが必要になる。（注 仏の大悲の力と衆生の信心が相応すること。すなわち仏の力が行者に加えられ、行者がそれを信心によって感得し、両者が一体化すること。）

最澄と空海によって、大乘仏教の仏陀の教義が整理され、平安時代の人々にとって身近な宗教の枠組みを作った功績は大きく、心の安らぎを与えたに違いない。

国風文化として花開いた平安文化の特徴を見ていきましょう。

大宝律令による政治と最澄と空海による仏教の体系化は平和な平安時代を到来させた。そのことが宮廷の文化を花開かせる。漢字から万葉仮名を経て「かな文字」が生まれ、貴族の女性がかな文字を使った「女房の文化」、内裏に住む女官による高度な文学、そして平安独自の芸術が誕生する。

女房の文化とは、内裏に住む女官によって構築された「女房の文化」のことであり、その代表が随筆の「枕草子」を著した清少納言、そして「源氏物語」を著した紫式部である。驚くべきことは、これらの文学が抒情詩であり、感性の文学であるということである。枕草子の「春は曙。やうやう白くなりゆく、山際すこし明かりて、紫立ちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜。・・・」など読めば、個人主義と感性あふれた自由を感じることが出来ます。両者共に、一条天皇（六十六代）の御世ですが、この後の芸術も感性豊かな作品にあふれているのを見ると、日本の天皇に余裕のある安定した時代であったのでしよう。

両書が著された時期は十世紀前後である。故ドナルドキーン氏が、「叙情的文学はヨーロッパでは一九〇〇年代の長編小説「失われた時を求めて」というフランスの作家ブルーストで初めてお目見えする。」と述べていることから、西洋よりは約九百年早く叙情的文学が完成していたことになる。

平安の文化では、清少納言、紫式部が突出して有名ですが、その他にも著名な文学や大和絵に代表される絵画が数多く出てきます。

「その他の文学作品と絵画」で代表的なものを挙げてみましょう。まず、

参照資料1-3:大和絵(源氏物語絵巻)

天井からの視点で描く



出典:ウィキペディア図柄引用

「古今和歌集」、醍醐天皇の勅撰による和歌集です。紀貫之等が編者となつて作成されたもので、紀貫之が書いた冒頭の一文、「やまと歌は、人の心を種として、よろずの言の葉とぞなりにける」は良く知られている。自分の感情を和歌で表現するのが当たり前の時代であつたことが理解できます。万葉集では梅が花の題材でしたが、桜に変わっているのも国風文化の影響かもしれません。また、内容の強さより形式・様式が重要視されてきているのも特徴です。物語文学には作者不詳のものが多く、今でも読まれる優れた文学作品が著された。

「土佐日記」、紀貫之の旅日記である。「をとこもすなる日記というものを、をむなもしてみむとて、するなり」という冒頭の書き出しは有名である。女に成りすまして仮名文字で書いている。竹から生まれたかくや姫が演じる当時権勢を誇つた藤原貴族への風刺と言われている。

「宇津保(うつほ)物語」、作者不詳。遣唐使として乗り込んだ船が暴風に遭い、ペルシヤに漂着し仙人に会つて琴(きん)を学び帰国する空想的な話から始まる恋愛物語。

「落窪物語」、作者不詳。義母にいじめられた落窪が道頼という貴公子に救われ復習をする物語。シンデレラを思わせる。シンデレラ物語の原点かもしれない。

「伊勢物語」、作者不詳。ある男の元服から死までを、仮名の文と歌によつて百二十五段の章段を連ねることで構成されている。在原業平が作者の一人ではないかと言われている。各話の内容は男女の恋愛を中心に、親子愛、主従愛、友情、社交生活など多岐にわたるが、普遍的な人間関係の諸相を描き出した物語となっている。

絵画の分野にも国風文化の特徴が見える。「大和絵」である(参照資料1-3)。絵巻物として描かれたもので、当時代を代表する絵巻物では次の四大絵巻が著名である。なかでも源氏物語絵巻は代表格作品を集大成したものとされるものである。「源氏物語絵巻」では、絵画としての優美さを求めながら、人間の顔を単純に描く「引目鉤鼻(ひきめかぎばな)」や、家の中の様子を上からのアングルで見える「吹き抜け屋台」といった技法を採用している。大和絵の基本技法が出来上がったと思われる。絵師を藤原隆能(たかよし)と特定していた時期もあったが、顔を描くときの筆致・画風の違いなどから他の絵師も加わり、源氏物語の五十四帖を仕上げたと考えられている。

「鳥獣戯画」、正式には鳥獣人物戯画（ちようじゅうじんぶつぎ）と言われる。動物の姿をかりて当時の世の中を風刺した。各巻の間に明確なつながりがなく、筆致・画風も違うため複数の僧侶によると考えられている。日本最古の漫画」とも称される。

「信貴山縁起絵巻」、当山の中興の祖とされる命蓮（みょうれん）に関する説話を描く。飛倉之巻では、命蓮が神通力を行って、托鉢に使用する鉢を飛ばし、蔵（くら）に信貴山にいる命蓮（みょうれん）の所まで飛んできたという奇跡譚である。人物の表情や躍動感を軽妙な筆致で描いた絵巻の一大傑作であり、『鳥獣人物戯画』とともに、日本の漫画文化のルーツとされる。作者不明だが、後白河法皇が関与したといわれる。

「伴大納言絵巻」、応天門の変（おうてんもんのはん）で応天門が燃える状況を描いた。平安時代の人々を描いたものとして優れており、人物や炎の表現に優れ、大胆な画面構成も高く評価されている。後白河法皇が『年中行事絵巻』とともに常磐光長（ときわみつなが）に描かせたと推定されている。

平安文化の特徴を見てきました。一般庶民は少ないですが、宮廷を中心とした物語や絵画でも、感性表現の自由さ、発想の豊かさが見て取れると思います。鳥獣戯画などでは世の仲の風刺をしてるのですが、お咎めもないおおらかな世界が広がっていたと思われます。

コラム【仏陀の悟り】

釈迦が説かれた「仏陀の悟りを」を要約しておきましょう。「動物に悟りは不要である」と言われます。その理由は其本能を見れば分かります(参照資料「一」)。

動物の本能は三つの欲求を持っています。疲れたら休む「休息の欲求」、腹がすいたら獲物を捕る「感覚の欲求」、敵が来れば己を守る「縄張りの欲求」です。脳で言えば脳幹(ワニの脳)と大脳辺縁系(ネズミ脳)の欲求です。ここには悟りは不要です。ところが、そこに人間の知的能力である「大脳皮質(理性脳)」が加わりますと、人間は無明の世界を持つことになる。人間の理性脳は「貪(とん)・瞋(じん)・痴(ち)」に取り囲まれた無知で

悟りの無い「無明」の世界を作り出す。

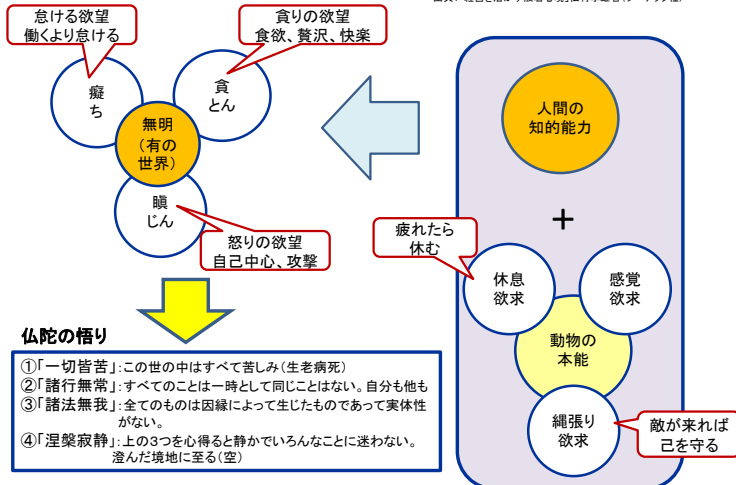
つまり、もつと美味しいものを食べたい、もつと贅沢をしたい、もつと楽しみたいという貪りの欲望(貪)の世界、楽しい状況があると、何時までもこの状態を続けていたいという自己中心の防衛本能が出て、壊そうとする敵が来ると攻撃をするという怒りの欲望(瞋)、そして、働くより怠けて幸せ(金持)になりたいという怠ける欲望(痴)という三つの欲望が無明の世界を作り百八煩惱で悩む状態を作る。

仏陀の悟りの教えはこの世を三つの観点で捉えなさいと申された。「一切皆苦」この世の中は総て苦であると認識せよ。人間は生老病死という四つの苦しみがある。「諸行無常」とは、すべてのことは一時として同じこととはない。自分も他も。このままでありたいと思っても相手が変わるし、自分も変わっていくということである。「諸法無我」とは、この世のあらゆる存在(現象、諸法)は他の影響や外部の条件(印ねん)に依存し、固定的な実態(我)存在しない。この「自由にならないもの」、「無常なもの」に対して、欲望を持ったり、執着するから貪瞋痴が起る。

これらの三つの観点を心得ると、「涅槃寂静」静かでないことに迷わない。澄んだ境地(空)に至ると、おっしゃられた。仏教は「苦」からの解脱を説いたものです。仏陀の教えが良く理解できると思いませんか。

参照資料1-4: 仏陀の悟り

出典:「経営を活かす般若心経」松村寧雄著(ソーテック社)



以降省略

参考図書

- 十「古事記」 竹田恒泰（学研）、「日本書紀」 宇治谷孟（講談社）
- 十「二歳のための 世界と日本の見方」 松岡正剛著 春秋社
- 十「日本の歴史 本当は何がすごいのか」 田中英道著 扶桑者
- 十「詳説 日本史図録 第七版」 山川出版社
- 十「弥生時代の吉野ヶ里」 佐賀教育委員会編集
- 十「法隆寺」 発行法隆寺
- 十「天平の薨 唐招提寺」 唐招提寺発行
- 十「興福寺の仏たち」 金子啓明著 東京美術

おわりに

日本の古代史を勉強しようとする時、誰もが手にするのが記紀でしょう。わたしもその常道を踏まえ、多くの時間と費用をかけてしまいました。しかし、日本の古代を理解しようとするとき、記紀の解釈本を購入してそれだけで理解しようとするのは困難です。

少し悪戦苦闘した末に「日本の現在の文化に古代はどんな影響を与えているのか」を捉えてみようと思いました。この視点は有効でした。日本は紀元前一万五千年前の縄文時代から文化が継続され蓄積されているのです。その背景には、他の国家と異なり日本が稀有な天皇の万世一系のもとで文化が途切れることなく継続し成長したことです。国風文化が出てきた平安時代の文化は室町時代に、さらに、安土桃山時代、江戸時代の町人文化へと受け継がれ蓄積されています。受け継がれ成長し蓄積されていくのですから日本特有の「道」の精神文化が出来上がっているのです。

その流れを知った上で古代を見ていくと、興味が出てきて現代の文化が如何に蓄積されてきたのかを理解しながら掘り進めていくことが出来ました。縄文時代は弥生時代に繋がり、古墳時代、飛鳥・白鳳時代、そして天平（奈良時代）が平安時代の礎であることが分かります。

この思考法を教えてくれたのが「世界と日本の見方」（松岡正剛著 春秋社）でした。日本の視点だけでは日本の歴史は捉えられませんかと述べています。文化の捉え方、そして日本の歴史と西欧の文化の関係と比較で日本文化の位置づけが明確になりましたし、田中英道先生の「日本の歴史 本当は何がすごいのか」（扶桑社）は日本文化の西洋文化に対する先進性の視点を教えてくれました。

この読本は、日本の文化を創り上げてきた日本の優れた先達を捉え、日本文化の素晴らしさを知ること、日本が大好きという人たちを増やしていきたいと思いました。私の中にあった「日本に対する自虐性」が完全にきえたように！

【著者略歴】 井上正和(いのうえまさかず)

熊本大学工学部、九州大学大学院工学研究科卒業後、1971年日本IBM(株)入社しSE部門に配属。1992年、中小・中堅企業コンサルティング部門を立ち上げ、責任者としてコンサルティングプロシージャの普及を図る。

2001年に独立し、有限会社 情報戦略モデル研究所を設立。

経営戦略やIT戦略の策定や構築に係る書籍出版、研修とコーチング支援、業務プロセス改善・改革に係る研修とコーチング支援などを多数手掛ける。2011年4月 神奈川工科大学で「情報と文化」講座で古代史講義を担当した時から、記紀を始めとした古代史に取り組み、素人の観点から古代史研究を開始し、現在まで16年間、16シリーズ(各5回講座)を開発し、古代史の講座を横浜市地区センターを中心に、学者ではない素人にでも分かる古代史セミナーを開催し好評を得ている。今後オンラインでの全国展開を計画している。

古代史シリーズ1「日本の古代文化とその伝道者」

発行日 令和7年3月22日 第2版発行

著 者 井上 正和

発行所 有限会社 情報戦略モデル研究所

〒226-0006 横浜市緑区白山2-2-E-216

TEL:045-934-7254

URL: <http://www.ism-research.com/>

本書は、法令の定める場合を除き、複製・複写することはできません。

●本著の読者お問い合わせは下記を参照ください。

お問い合わせ: ism.researchbook@gmail.com

ISBN 978-4-9912583-3-6
C1021 1400E

発行: 情報戦略モデル研究所
価格: 本体価格 1,400 円 + 税

ISM
研

主な内容
はじめに 第1章 「歴史の伝道師と精神文化」 第2章 「鎌倉から江戸時代の日本文化」 第3章 「日本の古代(倭)の文化」 第4章 「古代(倭)から大和へ」 第5章 「飛鳥・白鳳・天平文化」 おわりに